



図1 鯉幟 奈良 昭和初期 全長 430cm (天理参考館蔵品)

いらか
 麓の波と雲の波
 重なる波の中空を
 橋かをる朝風に

高く泳ぐや 鯉のぼり

(尋常小学唱歌 第五学年用『鯉のぼり』)

風薫る爽やかな5月にまことに似つかわしい歌である。麓は屋根瓦のこと、蒼い5月の空を大海原に見立て、白い雲と陽光に反射する家々の麓を白波になぞらえて、そこに鯉のぼりを泳がせる雄大で清々しい風景が目浮かぶ。5月5日が国民の祝日に制定されて、すでに70余年が経った。その制定の大きな理由は、この日が古来「端午の節句」として広く親しまれてきたことに由来する。5月5日、端午の節句といえ、武者人形、粽や柏餅、菖蒲、そして何と言っても鯉幟だろう。

日本は男うれしき幟かな

せいせい
 松瀬青々

正岡子規から「大阪に青々あり」と賞賛され、明治期に関西俳壇で活躍した松瀬青々が詠んだ一句である。鯉幟は、もともとは幟の「添え物」で、いわばストラップのようなものであった。招きの小旗の代わりに付けた小さな鯉が、人気を得てやがて巣立って巨大化した。成り立ちから既に出世魚である。元来、幟は神の降臨を願う目印だが、武家の旗指物にも通じる。軍陣を模して打ち立てる五月幟は、まさに「男子ここにあり、神のご加護を願わん」という宣言だろう。新たに男児が誕生し、初節句を迎えた家が立てる幟は特に「初幟」と称した。

今年又おと子うみけん幟敷

しょうは
 黒柳召波

召波は京都の商人。与謝蕪村の門人となり、向井去来を崇拜した江戸時代中期の俳人である。

京都でも幟は誇らしくはためいていただろうが、鯉幟は

江戸の産物で、泥絵具と手描きによる彩色は凧絵師が手がけた。間近で見ると強烈な原色の色調も、空高く上げると青空と富士山を背景によく映えたらしい。一方、上方の鯉幟は墨の濃淡を基調とした上品な趣のものが多く、東西の好みの違いが窺えて興味深い。

図1は真鯉で、緋鯉と一対だが、モノクロ写真では全く同じに見えるので緋鯉は省略した。吹き流し、真鯉、緋鯉をセットにする形式は昭和以降のこととみられ、子どものような青色の鯉が加わった現代の3点セットは戦後になってからで、さらに緑色や橙色などの鯉も現れるのは昭和30年代以降である。

江戸っ子の趣味に合致した鯉幟は巨大化し、幕末の錦絵に描かれるように悠々と空を泳いだ。しかし、武家はこれを一切立てなかったという。武家は幟、鯉幟は町民のシンボルで、身分社会がここにも厳然と投影される。ちなみに公家は幟も鯉幟も立てない。だからこそ、黄河の急流にある竜門という滝を、魚のなかで唯一登り切った鯉が竜に変化した故事に因んで、生まれた男児の立身出世を願って庶民は鯉幟を立てるのであろう。5月の空に泳ぐ、神の招き代でもある鯉幟に、現在の悪疫退散を願わん。



図2 大人8名で同様の鯉幟を持ちあげたところ。巨大さを実感していただきたい。於：参考館前庭